

名神
全線開通50周年



自然と
人をつなぐ
道づくり



日本で最初に開通した高速道路「名神高速道路」は、二〇一五年に全線開通五〇周年を迎えました。高速道路の緑化は、名神から始まり、歴史を積み重ね、現在の生物多様性への配慮につながっています。ここでは、その歴史と取組みの一部を紹介します。

名神高速道路（小牧IC～西宮IC）
一九六五年全通

1 高速道路緑化のはじまり

日本初の高速道路である名神高速道路は、海外の考えを参考に、運転する人の生理・心理的側面や感情特性にも配慮して設計されました。

「道路は可能な限り緑化して快適な道路景観を造成すべき」という考えのもと、『芝を張り植樹する』基本方針が立てられ、中央分離帯へも芝を張り樹木を植え、定期的に剪定していました。現在も一部の区間において、この方針が引き継がれています。



開通当時の様子

2 周辺景観に配慮

高速道路の切土のり面は、周辺景観に配慮して造成しています。写真の切土のり面は、斜面を緩やかな曲面に造成しました。現在、約五〇年が経過し、のり面は樹木が成長し、周辺景観と同化しています。



開通当初



約10年が経過した様子



約30年が経過した様子



約40年が経過した様子

3 のり面の緑化技術

名神建設以前は、のり面の浸食を防ぐ表面保護方法は芝を全面または筋状に植える工法しかありませんでした。高速道路建設では広いのり面ができるため、機械を使い、広いのり面に対応できる工法の開発が必要とされました。そこで、大規模施工が可能な『種子吹き付け工法』が、日本で初めて使われました。この工法は、今日でも改良を重ねられ、高速道路だけでなくさまざまな場所で活用されています。



初期ののり面緑化工試験の様子



現在ののり面緑化工法の例

4 緑化技術センターでの苗木育成

高速道路の緑化には大量に同形状の樹木が必要になります。

しかし、名神建設時は樹木の大量調達に困難で、需要の急増による樹木価格の高騰や市場の混乱が予想されました。そのため、一九五八年に緑化試験場（現緑化技術センター：滋賀県湖南市）を開設し、樹木の生産を開始しました。

緑化技術センターでは、開設から二〇一三年までに、約百五十万本の樹木や約六百万本のつる植物、約九十万本の『地域性苗木』を生産し、高速道路のさまざまな現場へ供給してきました。現在も生産を行っています。

「地域性苗木」とは、建設現場周辺に自生する樹木から採取した種子を育てた苗木です。「地域性苗木」は、市場で流通していない地域に自生している樹種を植えることができ、他の地域の植物との交雑を避け、種と遺伝子レベルの生物多様性を守ることができます。この取組みは、生物多様性保全に貢献しているとして、『平成二十一年度土木学会環境賞』（土木学会）、『二〇一〇年日経地球環境技術賞』（日本経済新聞社）を受賞しました。



現在の苗木育成の様子



緑化技術センター全体の様子



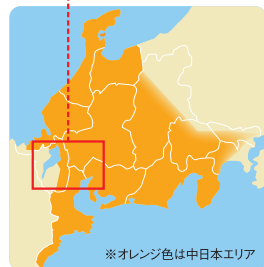
これからも「生物多様性に配慮した取り組み」を
続けていきます



ありがとう

50th

名神全線開通50周年



中日本高速道路株式会社
名古屋市中区錦 2-18-19
三井住友銀行名古屋ビル 〒460-0003
TEL:052-222-1620
<http://www.c-nexco.co.jp>

